

大学院リサイタルシリーズ④

秋風香る ピアノの調べ

2022年 10月15日（土） 11:00 開演（10:40 開場）

洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン 1F

⚠ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・ マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・ 大声や対面での会話はお控えください。
- ・ 演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・ 休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・ 客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・ 出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・ 万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催： 洗足学園音楽大学・大学院

Program

1. 寺島 梨湖

F. ショパン / ロンド ハ短調 作品 1

F. ショパン / 4 つのマズルカ 作品 17 より

第 1 曲 変ロ長調

第 2 曲 ホ短調

第 3 曲 変イ長調

第 4 曲 イ短調

2. 井坂 美月

R. シューマン / ピアノソナタ第 3 番

ヘ短調 作品 14 より

第 1 楽章 Allegro

第 2 楽章 Molto commodo

第 3 楽章 Andantino de Clara Wieck

第 4 楽章 Prestissimo possibile

■ 曲目解説

F. ショパン (1810-1849) / ロンド ハ短調 作品1

寺島 梨湖

この曲はショパンがピアノを学びながら、古典的な形式にしたがって書いた作品である。まだ柔軟性もなく、書きなれない硬直した面は多々あるように思われる。モーツァルト、フンメル、クラーマーなどの影響を受けているが、ショパン自身の発想も随所にある。スケールをゆったり大きくとって作曲した大曲である。作曲と同時にワルシャワで出版された作品だが、当初はまだ作品番号はつけられておらず、記念すべき作品1の番号が与えられたのは1835年にベルリンで再出版された時である。ショパンとしばしば二重奏を楽しむ間柄だったルイザ・ドゥ・リンデ夫人に捧げられている。4小節の序奏のあとに登場するハ短調のロンドの主題は軽やかなリズムに乗った華やかなもので、トリルと付点音符に飾られている。ハーモニーはシンプルだが、澁刺として生気に溢れ、瑞々しい魅力にみちている。各旋律のつなぎ方や繰り返しに技巧的な熟練を欠く面はあるが、ピアノ音楽特有の要素も多く取り入れられ、随所に美しい旋律が盛り込まれている作品である。

F. ショパン / 4つのマズルカ 作品17より

第1曲 変ロ長調, 第2曲 ホ短調, 第3曲 変イ長調, 第4曲 イ短調

寺島 梨湖

第1曲 変ロ長調

厚い和音が連続するマズルカで、リズムもはっきりしており、うたのような快適な主題“Vivo e risoluto”で始まる。「華麗なるマズルカ」と名付けたくような、ポロネーズに通ずる勇壮さを持った曲であり、堂々とした旋律が繰り返される。

第2曲 ホ短調

2曲目は憂鬱なマズルカで、主部のホ短調の憂鬱な気分を引きずったまま中間部に入るが、ここはハ長調であるにもかかわらず、鬱々とした楽想になっている。中間部後半は、低音のGの音を保ったまま、1音毎に和声を変えろという、「遊び」、「実験」をやっている、憂鬱の中にも「冗談」、「遊び」が盛り込まれた作品である。

第3曲 変イ長調

冒頭の主題は、掛留音とシンコペーションを多用しており、ハーモニーとリズムの不安定さがユニークである。中間部はホ長調の旋律と、ロ長調の軽いレツジェーロの上昇音階の2つの題材がどちらも魅力的な作品である。

第4曲 イ短調

ショパンがポーランドからパリに移って最初に書いた作品である作品17の4つのマズルカの中でも屈指の傑作として知られている。「小さなユダヤ人」の名で呼ばれることもあり、そのユダヤ人が酒に酔った農夫と口論をしたという場面を描いたものだと言われている。音数が少なくシンプルな曲だが、左手の和音は小刻みかつ微妙に変化しており、その微妙な和声が深い陰影を作る名曲である。憂いを含んだ開始部分から六の和音を含んだ一

時終止、半音階の滑り、非和音を經由する装飾音など、危うい展開が続き寒々とした雰
囲気をもっている作品である。

R. シューマン (1810-1856) / ピアノソナタ第3番 へ短調 作品14より

第1楽章, 第2楽章, 第3楽章, 第4楽章

井坂 美月

この曲はシューマンのピアノ・ソナタの中でも最も大きな規模を持っている。1836年に初版が出版され、晩年の1853年に改訂版が出版された。この作品が構想された初期の段階でシューマンは第1楽章、第2楽章スケルツォ、第3楽章スケルツォ、第4楽章「クララ・ヴィークの主題による6つの変奏曲」、第5楽章フィナーレの1830年代においては異例の構成で考えていたとされている。しかし初版は、出版社のハスリンガーの提案により、2つのスケルツォを割愛した3楽章構成で「管弦楽のない協奏曲」と題され出版された。改訂時は第1楽章に大きく手を加え、スケルツォ1曲を追加するなど4楽章構成の「グランドソナタ 第3番」としてまとめ直した。シューマンとしては珍しく外面的に華やかな効果が感じられ、第3楽章に重点が置かれた作品である。色彩感があり演奏技巧は難しいものを要求される。

第1楽章 Allegro 4分の4拍子 f-moll ソナタ形式。力強い左手の動機で幕を開ける。第1主題はクララの動機に基づき、第2主題でシューマン好みの新しいリズムが登場する。なだらかな旋律と激しさが入り混じった曲である。

第2楽章 Molto comodo 4分の3拍子 b-moll 3部形式。クララの動機に基づく下降形の主楽想で始まり、激しさ、怪異さを感じさせる。

第3楽章 Andantino de Clara Wieck 4分の2拍子 f-moll クララの作品から主題が借用された「クララ・ヴィークのアンダンティーノ」と4つの変奏曲である。自由な変奏曲の形をとり、各変奏の和声や楽節構成、キャラクターは異なるものである。第2変奏は、シューマンらしさを兼ね備え、第1変奏を主題より縮小している。第3変奏はリズムでユーモアを感じさせ情熱的であり、第4変奏は自由な形である。

第4楽章 Prestissimo possibile 4分の2拍子 f-moll 第1楽章同様ソナタ形式で書かれ、短い第1主題ののち抒情性豊かな旋律が流れる。展開部は3連音符の音型が両手で対話風に奏でられる。

Profile

寺島 梨湖

熊本県出身。ルーテル学院高等学校芸術コースを経て洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。洗足学園音楽大学大学院ピアノコース1年在籍。第19回九州音楽コンクール銀賞。第10回日本バッハコンクール全国大会金賞。大学在学中、2019～2021年度ピアノコース特別選抜演奏者に認定。ジェローム・グランジョン、ルイス・フェルナンド・ペレス、グヤーシュ・マルタ、シャーンドル・ファルヴァイ、ヴィレム・ブロンズの各氏の特別レッスンを受講。これまでにピアノを谷口昌子、塩津貴子の各氏に、現在ピアノを鳥羽瀬宗一郎、浦壁信二の各氏に師事。

井坂 美月

洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。洗足学園音楽大学大学院ピアノコース2年在籍。ピティナ・ピアノ・コンペティションPre特級一次予選優秀賞。東京ピアノコンクール一般A部門第2位。2017～2021年度前田音楽奨励賞受賞。2018～2020年度特別選抜演奏者認定。2020,2022年度前田記念奨学金生。ルイス・フェルナンド・ペレス、グヤーシュ・マルタなどの各氏の特別レッスンを受講。現在ピアノを新海未穂、佐々木恵子の各氏に、ソルフェージュを佐々木邦雄氏に師事。